

# アオスタ司教座聖堂研究 ——舗床モザイクを中心に

天 幸 奈 穂

A study of Aosta Cathedral, with a Focus on the Floor Mosaic

Naho TENKO

## Abstract

The Aosta Cathedral and the Sts. Peter and Ursus Collegiate Church in Aosta, a city in northwestern Italy, represents northern Italian Romanesque art. Therefore, both are important in terms of their religious background as well as decorations. In 1132, the Augustinian rule was adopted in the Sts. Peter and Ursus Collegiate Church. In line with this ecclesiastical reform, the historiated capitals in the cloister and the floor mosaic were created in the Sts. Peter and Ursus Collegiate Church. On the other hand, the Aosta Cathedral did not adopt the St. Augustinian rule, and its relationship with the reformed Church deteriorated. Despite such circumstances, it is noteworthy that the floor mosaic was created in Aosta Cathedral as well during the same period. This study discusses the better-preserved late 12<sup>th</sup> century floor mosaic of Aosta Cathedral and examines the influence of the reform on the cathedral through its iconography.

## はじめに

イタリア北西部の都市アオスタにあるアオスタ司教座聖堂（以下、アオスタ大聖堂）とサン・ピエトロ・エ・サントルソ参事会聖堂（以下、サントルソ聖堂）は、ロマネスク期に建造された。アオスタ大聖堂には、11世紀初頭制作のフレスコ画と12世紀後半の制作とされる舗床モザイク（図1）、12世紀末から13世紀初頭に制作された舗床モザイク（図2）が残されている。一方のサントルソ聖堂には11世紀初頭制作のフレスコ画、12世紀の回廊と舗床モザイク（図3）が現存する。いずれも北イタリア・ロマネスク美術を代表する。それゆえ、両聖堂は装飾の点で重要だが、同時にその宗教的背景も重要である。すなわち、1132年にサントルソ聖堂において聖アウグスティヌス会則を取り入れる改革が行われたことである。改革に伴い、サントルソ聖堂では回廊と舗床モザイクが制作された。一方、アオスタ大聖堂では聖アウグスティヌス会則が採用されなかったために、改革を行ったサントルソ聖堂との関係が悪化した。そうした状況にも関わらず、アオスタ大聖堂において、サントルソ聖堂と同時期に舗



図1 アオスタ大聖堂内陣、舗床モザイク、12世紀後半



図2 アオスタ大聖堂内陣、舗床モザイク、12世紀末～13世紀初頭



図3 サントルソ聖堂内陣、舗床モザイク、1150年頃

床モザイクが制作されたことは注目に値する。本稿では、アオスタ大聖堂の、より保存状態の良い12世紀後半制作の舗床モザイクについて論じ、同聖堂における改革の影響について検討する。そのために、まず、12世紀までのアオスタの都市の歴史、サントルソ聖堂における1132年の改革について確認する。次に、アオスタ大聖堂と12世紀後半制作の舗床モザイクに関する従来の知見を検証し、そのうえで、アオスタ大聖堂舗床モザイクの図像について考察する。

## 1. アオスタ

### 1) 都市の歴史

まず、12世紀までの都市アオスタの歴史を確認する。都市アオスタの起源は古代ローマ時代の紀元前25年に建設されたアウグスタ・プラエトリアである。11世紀前半には、ブルグント王国に属しており、モーリエヌ伯がブルグントの王の名で権力を行使していた<sup>(1)</sup>。1050年の文書では、サヴォイア家の祖であるウンベルト1世が、1032年のアオスタの伯として記載されている。ウンベルト1世は、息子ブルカルドをアオスタ司教に任命（在位1026-1031年）した。そのためこの時点では、教会と政治的な権力が結びついていたと考えられている。1038年以降、ブルグント王国が神聖ローマ皇帝コンラート2世により占領されたため、モーリエヌ伯は神聖ローマ帝国の名のもとに権力を行使した。そして、12世紀、アメデーオ3世（在位1103-1148年）の時代には、教会組織への伯の支配力が弱まっていた。

### 2) 12世紀のアオスタ

12世紀のアオスタの状況を語る上で、アオスタ大聖堂とサントルソ聖堂との関係について触れる必要がある。サントルソ聖堂は、都市アオスタの城壁外、紀元前4世紀からネクロポリスであった場所に位置しており、10世紀末から11世紀初頭にかけて再建された<sup>(2)</sup>。現聖堂には、1020年から1040年にかけての制作とされるフレスコ画、1132年頃制作の柱頭彫刻が施された回廊、1150年頃制作の舗床モザイク（図3）が残されている<sup>(3)</sup>。12世紀のアオスタにおける重要な出来事として、サントルソ聖堂の1132年の改革が挙げられる。この改革を機にアオスタ大聖堂とサントルソ聖堂の対立が起こった。

1132年の改革とは、サヴォイア伯領のアボンダンス修道院（フランス）の聖アウグスティヌス会則に従う

(1) 11世紀から13世紀にかけてのアオスタの都市の歴史については以下参照：Maria Luisa Vallacqua Guariento, *I codici liturgici decorati e miniati delle Biblioteche della Valle d'Aosta: secoli X-XIII*, Quart(AO): Musumeci, 2000, pp. 11-15.

(2) サントルソ聖堂については以下参照：Renato Perinetti, "Aosta: la chiesa dei SS. Pietro e Orso", *Acta Congressus Internationalis XIV Archaeologiae Christianae*, vol. 1, 2006, pp. 589-608; Renato Perinetti and Mauro Cortelazzo, "Il complesso episcopale e le chiese di S. Lorenzo e S. Orso di Aosta (Italia)", *La valorisation des sites archéologiques: Actes du colloque international de Martigny(Suisse)*, Lausanne: Cahier d'Archéologie Romande, 2012, pp. 227-240.

参事会員であった、アオスタの司教エリベルト（在位 1132-1138/39 年）とサントルソ聖堂参事会長（priore）アルノルフォ・ディ・アヴィーゼが、1132 年にサントルソ聖堂の共同体のもとに聖アウグスティヌス会則を取り入れる許可を教皇インノケンティウス 2 世から得たことを指す<sup>(4)</sup>。サントルソ聖堂の 1132 年の改革は、11 世紀から 12 世紀にかけての教会改革の中で起こった<sup>(5)</sup>。教皇レオ 9 世は、聖職売買などの教会の墮落行為に対し改革を進めた。世俗の参事会員が会則に従い共同生活を送る参事会員に取り替えられたことは、この改革における重要な点である。教会改革はローマから広まり、イタリアを中心に西欧各地で行われた。

アオスタが 1132 年当時属していたサヴォイア伯領では、サントルソ聖堂以前に同様の改革が行われた例がある<sup>(6)</sup>。515 年に設立されたスイスのサン・モーリス・ダゴヌ修道院は 1128 年に共同体の規則正しい生活のために聖アウグスティヌス会則を採用した。さらに、アボンダンス修道院ではサン・モーリス・ダゴヌ修道院以前に改革が行われ、聖アウグスティヌス会則がサヴォイア伯領に広まる契機となった。

シェリル・リン・カウフマンは、文書に基づきサントルソ聖堂の 1132 年の改革について検討している<sup>(7)</sup>。改革が 1132 年に開始されたことは、教皇インノケンティウス 2 世が司教エリベルトに宛てた教皇勅書とサントルソ聖堂回廊の柱頭番号 36 に刻まれた銘文から明らかにされた<sup>(8)</sup>。サントルソ聖堂で 1132 年に新たな会則が取り入れられた一方で、アオスタ大聖堂では改革が行われなかった。アオスタ大聖堂ではなくサントルソ聖堂で改革が行われた理由として、司教エリベルトは当初アオスタ大聖堂の改革に着手したものの受け入れられなかったため、城壁外にあるもう一つの有力な共同体であるサントルソ聖堂で改革を行ったとカウフマンは指

- (3) サントルソ聖堂のフレスコ画については以下参照：Costanza Segre Montel, “Committenza e programma iconografico nei due cicli pittorici di Sant’Orso e della cattedrale di Aosta”, in *Medioevo aostano: la pittura intorno all’anno mille in cattedrale e in Sant’Orso* 1, ed. Sandra Barberi, Torino: Allemandi, 2000, pp. 137-183. サントルソ聖堂の回廊については以下参照：Robert Berton, *Les Chapiteaux du cloître de Saint-Ours: un bijou d’art roman au Val d’Aoste*, Novara: Istituto geografico de Agostini, 1954; Sandra Barberi, *Il Chiostro Di Sant’Orso in Aosta*, Roma: L’Erma di Bretschneider, 1988; Sandra Barberi, “Il chiostro”, in *Sant’Orso di Aosta* 1, ed. Bruno Orlandoni, Aosta: Tipografia Valdostana, 2001, pp. 49-66; Paolo Papone, “Teologia pastorale e iconologia: l’interpretazione del chiostro romanico di Sant’Orso in Aosta”, PhD diss., Pontificia Università lateranense, 2011; Paolo Papone, *Il chiostro di Sant’Orso in Aosta e la sua interpretazione*, Aoste: Archives historiques régionales, 2011. サントルソ聖堂の舗床モザイクについては以下参照：Renato Perinetti, “I mosaici medievali di Aosta”, *Atti del VI Colloquio dell’Associazione Italiana per lo Studio e la Conservazione del Mosaico*, 2000, pp. 165-169, in part. pp. 161-174; Paolo Papone, Viviana Vallet, “Il mosaico del coro”, in *Sant’Orso di Aosta: il complesso monumentale* 1, ed. Bruno Orlandoni, Elena Rossetti Brezzi, Aosta: Tipografia Valdostana, 2001, pp. 35-48 Renato Perinetti and Laura Pasquini, “Il mosaico del coro della chiesa dei Santi Pietro e Orso ad Aosta”, *La mosaïque gréco-romaine*, vol. 1, 2005, pp. 329-338.
- (4) サントルソ聖堂における 1132 年の改革については以下参照：Alessandro Barbero, “Una comunità di canonici riformati nei secoli XII e XIII: il capitolo di S. Orso ad Aosta”, in *Valle d’Aosta medievale*, Napoli: Liguori, 2000, pp. 79-125; Maria Luisa Vallacqua Guariento, *I codici liturgici decorati e miniati delle Biblioteche della Valle d’Aosta: secoli X-XIII*, Quart(AO): Musumeci, 2000; Paolo Papone and Viviana Vallet, “Storia e liturgia nel culto di Sant’Orso”, *Bulletin de l’Académie Saint-Anselme*, vol. 7, 2000, pp. 217-400; Cheryl Lynn Kaufman, “The Augustinian canons of St. Ursus: reform, identity, and the practice of place in Medieval Aosta”, PhD diss., University of Texas at Austin, 2011, (<https://repositories.lib.utexas.edu/handle/2152/ETD-UT-2011-05-3273>), 最終アクセス：2023 年 5 月 13 日。聖堂参事会とは、司祭の集団を指す。11 世紀から 12 世紀の教会改革により、参事会員が聖アウグスティヌス会則を模範とし、共同生活を送る事例が多くみられるようになった。聖堂参事会については以下参照：大貫隆・ほか編、『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年。
- (5) 教会改革については以下参照：Kaufman, “The Augustinian canons of St. Ursus”, 2011, *op. cit.*, in part. pp. 3-9.
- (6) サヴォイア伯領における教会改革については以下参照：Stella Ferrari, “St. Abbondio and St. Orso: expressions of devotion in Northern Italy through architecture, liturgical space and iconography”, in *Saints and the city: Beiträge zum Verständnis urbaner Sakralität in christlichen Gemeinschaften (5.-17. Jh.)*, ed. Michele Camillo Ferrari, Erlangen: FAU University Press, 2015, pp. 115-148.
- (7) Kaufman, “The Augustinian canons of St. Ursus”, 2011, *op. cit.*, in part. pp. 56-99.
- (8) 柱頭番号は 1954 年のロバート・バートンによる番号を使用：Berton, *Les Chapiteaux du cloître de Saint-Ours*, 1954, *op. cit.* 柱頭番号 36 のラテン語銘文は以下の通り：“ANNO AB INCARNATION(E) D(OMI)NI MCXXXIII IN H(O)C CLAUSTROR(UM) REGULAR(I)S VITA INCEPTA EST” (Barberi, “Il chiostro”, 2001, *op. cit.*, in part. p. 49.) 「主の受肉から 1133 年目に、この回廊で規則正しい生活が始まった」(筆者による試訳。以下の英訳も参照した：Kaufman, “The Augustinian canons of St. Ursus”, 2011, *op. cit.*, in part. pp. 56-99.)。改革の開始年は現在の暦では 1132 年であるが、ピサ暦では 1133 年である：Papone and Vallet, “Storia e liturgia nel culto di Sant’Orso”, 2000, *op. cit.*

摘している<sup>(9)</sup>。サントルソ聖堂の1132年の改革以降、アオスタ大聖堂とサントルソ聖堂は財産をめぐる対立するようになった<sup>(10)</sup>。

サントルソ聖堂は、多くの初期キリスト教時代の聖堂と同じく、古代ローマ時代の城壁の外に位置する重要な墓の上に建てられた。1132年の改革以前から、アオスタ大聖堂と同程度の地位を有し、かなりの財産も有していたと考えられている。サントルソ聖堂とアオスタ大聖堂は異なる二つの共同体であったが、両聖堂への寄付について記された文書から1132年以前に財産の一部を共有していたことがわかっている。しかし、1135年、教皇インノケンティウス2世がサントルソ聖堂の参事会長アルノルフォに宛てた教皇勅書では、アオスタ大聖堂の世俗の参事会員たちがサントルソ聖堂の参事会員たちの共同財産を脅かしていた可能性が示唆されている<sup>(11)</sup>。また、同教皇勅書では、初めて聖堂のタイトル聖人として聖ペトロの名が登場した。サントルソ聖堂は、聖ペトロとアオスタ、サントルソ聖堂に所縁のある聖オルソに捧げられている。聖ペトロに捧げられていることは、教皇権とのつながりを示し、教皇の保護と承認を強調する。それゆえ、カウフマンはアオスタ大聖堂に対抗し、参事会員たちのアイデンティティを立て直すために、1132年以降に聖オルソに加えて聖ペトロに捧げられるようになったと指摘している<sup>(12)</sup>。さらに、ステッラ・フェラーリは、アオスタ大聖堂との関係が悪化したことから教皇の権威を強調する必要が生じたという当時の状況に注目している<sup>(13)</sup>。1135年以降の1144年と1146年の教皇勅書においてもアオスタ大聖堂を脅威とする記述がみられるように、1132年の改革に端を発する財産をめぐる対立は約20年続いたが、1151年頃にアオスタの司教となったアルノルフォによって、サントルソ聖堂とアオスタ大聖堂がお互い歩み寄るといふ平和的な形で解決された。しかし、アオスタ大聖堂が聖アウグスティヌス会則を取り入れることはなく、体制は異なつたままであった。次に、アオスタ大聖堂について現在わかっていることを確認する。

## 2. アオスタ大聖堂

1976年から行われたアオスタ大聖堂の考古学的調査により、聖堂建造以前の状態が明らかとなった<sup>(14)</sup>。現在アオスタ大聖堂が建つ場所は、古代ローマ時代には政治、行政、商業の中心地であるフォルム（公共広場）であった。1世紀の建物の基壇の跡や3世紀末から4世紀初頭の建物の痕跡が発見されている。4世紀末から5世紀初頭にかけて最初の聖堂が建設され、11世紀にはアオスタ司教アンセルモ（在位994-1026年）による再建が行われた。

ロマネスクの聖堂は、三廊式で、1040年から1050年頃にかけてフレスコ画が制作された<sup>(15)</sup>。現聖堂の屋根裏部分に現存するフレスコ画は1979年に発見された。南壁には、『出エジプト記』からモーセの物語、「十の災い」、新約聖書から「金持ちとラザロのエピソード」（ルカ16:19-31）、さらに南壁上部には23～36人の聖職者の半身像が描かれており、北壁には聖エウスタキウスの生涯のエピソード、その上部には、「キリストの祖先たち」の半身像が描かれている。また、現在は11世紀前半の三つの柱頭及び1442年から1460年にかけて

(9) Kaufman, “The Augustinian canons of St. Ursus”, 2011, *op. cit.*, in part. pp. 74-75.

(10) サントルソ聖堂とアオスタ大聖堂の対立については以下参照：Kaufman, “The Augustinian canons of St. Ursus”, 2011, *op. cit.*, in part. pp. 80-99; Guariento, *I codici liturgici decorati e miniati delle Biblioteche della Valle d’Aosta*, 2000, *op. cit.*, in part. pp. 11-15.

(11) ピサ暦では1136年：Papone and Vallet, “Storia e liturgia nel culto di Sant’Orso”, 2000, *op. cit.*, in part. p. 239.

(12) Kaufman, “The Augustinian canons of St. Ursus”, 2011, *op. cit.*, in part. pp. 84-85. 初期キリスト教時代から聖ペトロに捧げられていたという可能性もあるが、聖ペトロと聖オルソ双方がタイトル聖人として文書に登場するのは1135年以降である：Joseph-Gabriel Rivolin, “Le principali chiese aostane nei secoli XI e XII”, in *Medioevo aostano: la pittura intorno all’anno mille in cattedrale e in Sant’Orso* 1, ed. Sandra Barberi, Torino: Allemandi, 2000.

(13) Ferrari, “St. Abbondio and St. Orso”, 2015, *op. cit.*, in part. pp. 137-148.

(14) アオスタ大聖堂の考古学的調査については以下参照：Renato Perinetti, “La cattedrale medievale di Aosta”, in *Medioevo aostano: la pittura intorno all’anno mille in cattedrale e in Sant’Orso* 1, ed. Sandra Barberi, Torino: Allemandi, 2000, pp. 31-46.

(15) アオスタ大聖堂のフレスコ画については以下参照：Montel, “Committenza e programma iconografico”, 2000, *op. cit.*; Hans Peter Autenrieth and Beate Autenrieth, “Gli affreschi della cattedrale di Aosta”, in *Medioevo aostano: la pittura intorno all’anno mille in cattedrale e in Sant’Orso*. 1, ed. Sandra Barberi, Torino: Allemandi, 2000, pp. 131-136.

て建てられた回廊のみ残されているが、文献資料により 1044 年頃に回廊が存在していたことがわかっている。

11 世紀後半にファサードの西側が全面的に改築され、それに伴いアオスタ大聖堂は東西に内陣を持つ形になった。東側内陣は大聖堂のタイトル聖人である聖母マリアに捧げられ、司教と参事会員たちが司式を行う場所、つまりアオスタ大聖堂としての機能を有していたと考えられている。一方の西側内陣は、サン・ジョヴァンニ・バッティスタ聖堂のタイトル聖人である洗礼者ヨハネに捧げられており、教区の典礼で使用された場所、つまりサン・ジョヴァンニ・バッティスタ聖堂としての機能を有していたとされる。サン・ジョヴァンニ・バッティスタ聖堂の存在はローカルな歴史家によりその存在を提唱されていたが、考古学的調査と残された文書の記述によりその存在が証明された。つまり、アオスタ大聖堂は 11 世紀後半には二つの内陣を持つ単一の建物であったが、大聖堂と教区教会の二つの機能を持ち、参事会と教区という二つの独立した組織を所有者としていた<sup>(16)</sup>。16 世紀初頭に既存の二つの聖堂機能を再統合し、聖母マリアに捧げられた単一の聖堂の新たな入口を設けることを目的として西側へ聖堂が拡張されたため、西側内陣は現存しない。一方、東側内陣には、二つの異なる時代に制作された舗床モザイクが残されている（図 4）。内陣の西側には 12 世紀後半に制作された舗床モザイク（図 1）、東側には 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけて制作されたとされる舗床モザイク（図 2）が現存する。

12 世紀末から 13 世紀初頭にかけて制作されたとされる、現内陣の東側に位置する舗床モザイクには、現実と想像上の動物、擬人化されたティグリリス川、ユーフラテス川が表されている<sup>(17)</sup>。場面が不完全であることから、より大きなサイクルの一部であった可能性がある。また、川の擬人像が 12 世紀後半制作の舗床モザイクにもみられるという図像の重複から、元々は洗礼者ヨハネに捧げられていた西側の内陣に配されていたと考えられている。



図 4 アオスタ大聖堂、内陣（東側から撮影）

(16) Perinetti, “La cattedrale medievale di Aosta”, 2000, *op. cit.*, in part. pp. 31-37; Joseph-Gabriel Rivolin, “Le principali chiese aostane nei secoli XI e XII”, in *Medioevo aostano: la pittura intorno all'anno mille in cattedrale e in Sant'Orso* 1, ed. Sandra Barberi, Torino: Allemandi, 2000, pp. 19-20.

(17) アオスタ大聖堂の 12 世紀末から 13 世紀初頭制作の舗床モザイクについては以下参照：Perinetti, “I mosaici medievali di Aosta”, 2000, *op. cit.*, in part. pp. 163-164.

### 3. アオスタ大聖堂舗床モザイク（内陣西側、12世紀後半）

#### 1) アオスタ大聖堂舗床モザイクの記述

内陣の西側に位置する舗床モザイク（図1）は、縦6.24m、横4.80mの長方形である<sup>(18)</sup>。エドアルド・ブルノットは多くの修復がなされているとし、レナート・ペリネッティは、直近の修復が1967年であると述べている<sup>(19)</sup>。ペリネッティは、舗床モザイクがクリプタ西壁の外縁からはみ出すように配されていることから、12世紀前半の内陣拡張後、つまり12世紀後半に制作されたと指摘している。本稿ではペリネッティに従い、舗床モザイクの制作年代を12世紀後半とする。

エレナ・ピアネアは、アオスタ大聖堂舗床モザイクが12世紀ピエモンテの舗床モザイクとは様式的に異なるとし、色彩豊かで生き生きとした表現の点からサン・ドニ聖堂の舗床モザイク（12世紀中頃）との類似を指摘している<sup>(20)</sup>。そのため制作工房については、アルプスの向こうからの職人が働いていた可能性や北方のモデルに基づきローカルな職人たちが作業を行った可能性を示唆している。

舗床モザイクは長方形の枠と円により構成されている。最も外側の枠には幾何学模様が描かれているが、模様途中で切断されていることから不完全な状態であることがわかる。幾何学模様の内側にはさらに長方形の枠があり、その四隅には天国の四つの川の擬人像が描かれている。円の中央には太陽と月を持つ年の擬人像（アンヌス）（図5）、年の擬人像を囲むように12か月の擬人像が配されている。1月は二つの顔を持ち、1年ののはじまりを司る古代の神ヤヌスが扉の間に立つ姿により表されている（図6）。ジェームズ・カーソン・ウェブスターとペリーヌ・マーヌは、開かれた扉と閉じられた扉の間に立つヤヌスの姿が古い年から新しい年への年の推移を表すと指摘している<sup>(21)</sup>。2月は、火に当たり暖をとる人物（図7）、3月は葡萄の木を剪定をする人物（図8）、4月は芽吹いた若枝もしくは花を両手に持つ人物で、向かって左下には鳥の巣のようにも見える籠が描か



図5 「年の擬人像（アンヌス）」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図6 「1月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図7 「2月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半

(18) アオスタ大聖堂の舗床モザイク（内陣西側、12世紀後半）については以下参照：Édouard Aubert, “Les Mosaïques de la cathédrale d’Aoste”, *Annales archéologiques*, vol. 17, 1857, pp. 265-270; Elena Pianea, “I mosaici pavimentali”, in *Piemonte romanico*, ed. Giovanni Romano, Torino: Fondazione CRT, 1994, pp. 393-420; Edoardo Brunod, *La cattedrale di Aosta: Musumeci*, 1975, in part. pp. 92-103; Perinetti, “I mosaici medievali di Aosta”, 2000, *op. cit.*, in part. pp. 162-163.

(19) ペリネッティの先行研究は以下参照：Perinetti, “I mosaici medievali di Aosta”, 2000, *op. cit.* アオスタ大聖堂舗床モザイクの修復に関して、ヴァッレ・ダオスタ自治州のホームページに掲載されている2015年の報告では修復作業が完了した旨が記されている：Regione Autonoma Valle d’Aosta, “Rapport Annuel 2015”. ([https://www.regione.vda.it/rapportoannuale2015/rapport\\_istr\\_26.html](https://www.regione.vda.it/rapportoannuale2015/rapport_istr_26.html)), 最終アクセス：2023年5月24日。

(20) ピアネアは、サン・ドニ聖堂舗床モザイクとの比較からアオスタ大聖堂舗床モザイクの制作年代を12世紀後半としている。ピアネアの先行研究は以下参照：Pianea, “I mosaici pavimentali”, 1994, *op. cit.*

(21) James Carson Webster, *The labors of the months in antique and medieval art to the end of the twelfth century*, New York: AMS Press, 1938, in part. p. 136.; Perrine Mane, *Calendriers et techniques agricoles: France-Italie, XIIe-XIIIe siècles*, Paris: Le Sycamore, 1983, in part. pp. 88-92.

れている（図9）。5月は馬に跨った人物（図10）、6月は草刈りをする人物（図11）により表されている。4月と5月は労働とは関係のない擬人像により表されているが、中世の月暦図によくみられる表現である。4月の芽吹いた枝や花を手に持つ人物の姿は春の到来を象徴しており、5月は穏やかな季節に馬に乗って遠出をする人物を表している。7月は小麦を刈り取る人物（図12）、8月は脱穀をする人物（図13）、9月は樽の中で葡萄を踏み葡萄酒を作る人物（図14）、10月は種蒔きをする人物（図15）、11月は冬に備えるための薪集めを



図8 「3月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図9 「4月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図10 「5月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図11 「6月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図12 「7月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図13 「8月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図14 「9月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図15 「10月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半

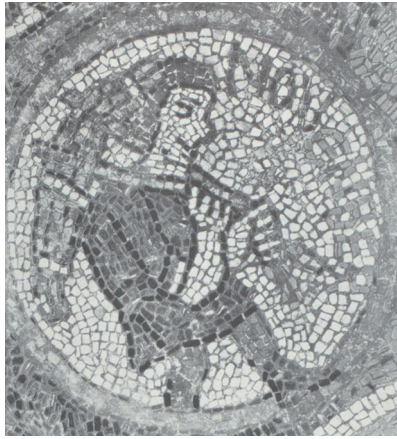


図16 「11月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半



図17 「12月」、アオスタ大聖堂舗床モザイク、12世紀後半

する人物（図16）、12月は新年の宴会のための豚の屠殺の場面（図17）により表されている。

## 2) ロマネスクの月暦図

12世紀から13世紀にかけての西欧世界において、月々の行事や田園での労働に従事する12か月の擬人像等を描いた月暦図を配した彫刻、フレスコ画、舗床モザイクが多く制作され、聖堂外壁や内部を飾った<sup>22)</sup>。古代の月暦図ではその月に関する儀式や祭日が表されたが、12世紀においては中世の社会全体が農業に積極的に取り組むようになったことや11世紀頃より労働が魂の救済の手段として肯定的に評価されはじめたことから、農作業に従事する人物など季節の流れに沿った日常的な場面が月暦図に採用された。月暦図は、12という数字から十二使徒と繋げられ、キリスト教的な意味を持つと同時に、地上の恵みを表現する労働の場面を含むために地上世界の寓意として捉えられることもあった。月暦図の作例は、北イタリア、フランスに多く現存しており、アオスタ大聖堂の舗床モザイクもその1つである。イタリアの月暦図の図像は多様であるが、アオスタ大聖堂の月暦図は1月に配された扉の間に立つヤヌス（図6）を除き、イタリアでよくみられるものと言えるだろう。マニュエル・アントニオ・カスティニエirasは、月暦図におけるヤヌスの図像について述べて

22) 本稿において月暦図とは、児嶋由枝に従い、12か月の擬人像、黄道12宮、月々の行事や風物等が総合的に表されているものを指す。月暦図については以下参照：Webster, *The labors of the months*, 1938, *op. cit.*; Mane, *Calendriers et techniques agricoles*, 1983, *op. cit.*; 児嶋由枝「笛吹き三月：北イタリア・ロマネスク聖堂に見る十二ヶ月の擬人像」『上智史學』第51号、2006年、pp. 157-176。12世紀から13世紀初頭の北イタリアの彫刻作品に表された月暦図の作例としては、モデナ大聖堂北扉口通称「魚市場の扉口」の扉口彫刻、サン・ゼノ聖堂プロティロのフリーズ彫刻、フィデンツァ大聖堂アプシス外壁の彫刻、パルマ大聖堂扉口彫刻、パルマ洗礼堂のアンテラーミによる彫刻、フェラーラ大聖堂美術館所蔵の彫刻、クレモナ大聖堂プロティロのフリーズ彫刻などが挙げられる。彫刻作品に表された月暦図の作例については以下参照：Webster, *The labors of the months*, 1938, *op. cit.*, in part. pp. 136-150; 児嶋, 「笛吹き三月」, 2006, *op. cit.*。12世紀から13世紀初頭の北イタリアにおける舗床モザイクの月暦図の作例としては、サン・コロンバーノ修道院（ボッピオ）、サン・サヴィーノ聖堂（ピアチェンツァ）、サン・ミケーレ聖堂（パヴィア）の舗床モザイク、パヴィア市立博物館所蔵のサンタ・マリア・デッレ・ストゥオーイエ聖堂に配されていた舗床モザイク、サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂（ラヴェンナ）の舗床モザイク、レッジョ・エミリア市立博物館所蔵のサン・ジャコモ・マッジョーレ聖堂に配されていた舗床モザイクなどがある。また、南イタリアの舗床モザイクの月暦図の作例としては、オトランド大聖堂が挙げられる。舗床モザイクの月暦図の作例については以下参照：Webster, *The labors of the months*, 1938, *op. cit.*, in part. pp. 136-150; Adriano Peroni, *San Michele di Pavia*, Milano: Cassa di risparmio delle provincie lombarde, 1967, in part. pp. 123-132; Raffaella Farioli Campanati, *I mosaici pavimentali della chiesa di S. Giovanni Evangelista in Ravenna*, Ravenna: Edizioni del Girasole, 1995, in part. pp. 99-103; Charles Edward Nicklies, “Cosmology and the labors of the month at Piacenza: the crypt mosaic at San Savino”, *Gesta*, vol. 34, no. 2, 1995, pp. 108-125; Giordana Trovabene, “Il pavimento musivo di San Giacomo Maggiore a Reggio Emilia: problemi di integrazione iconografica e stilistica”, *Corso di Cultura sull'Arte Ravennate e Bizantina: Seminario Internazionale sul Tema: Ricerche di Archeologia Cristiana e Bizantina*, vol. 42, 1995, pp. 901-928; Maddalena Vaccaro, “Pavia, città ragguardevole”: *mosaici pavimentali e cultura figurativa nel XII secolo*, Quingentole (Mn): SAP, Società archeologica, 2016, in part. pp. 210-284.



いる<sup>23)</sup>。ヤヌスの図像は古代起源であり、12世紀には月暦図において宴会をする姿や暖をとる姿など日常的な姿へと変化していった。扉の間に立つヤヌスの図像は中世の時代に生み出されたヤヌスの新しい型の中でも最初期に登場したものであり、その姿はイシドールの『語源』におけるヤヌスの記述に一致する<sup>24)</sup>。また、カスティニェイラスは、ヤヌスの両脇の建物がフォロ・ロマーノのヤヌス神殿を再解釈したものであり、扉の間に立つヤヌスの図像が古代ローマで行われていたヤヌス神殿の開閉の儀式を表す可能性を指摘している。扉の間に立つヤヌスの図像は古代のヤヌスの図像とは一致しないものの、古代の神や儀式を想起させる。

次に、アオスタ大聖堂舗床モザイクの図像について検討するために、まず舗床モザイクの特徴的な図像選択について確認する。

### 3) 舗床モザイクの図像選択

舗床モザイクは、古代から見られ、7世紀以降一度姿を消すが、11世紀から12世紀に再び制作されるようになった。古代においてもロマネスクの時代においても、舗床モザイクの図像としては、自然の風景や百科全書的な内容、宇宙論的な主題が選ばれ、キリストに関するモチーフは避けられた<sup>25)</sup>。こうした舗床モザイクにおける図像選択の理由は、古代では427年の布告においてキリストのモノグラムを床に配することが禁じられ、12世紀には聖ベルナルの『ギョーム大修道院長に送る弁明』(『アポロギア』)12章で床に宗教的なモチーフを配することが強く非難されたことから伺える<sup>26)</sup>。それゆえ、舗床モザイクの図像においては、壁や天井に配された図像のように簡単に理解できる一般に承認された普通の図像の型は用いられず、文字に依存する度合いも強かった。つまり、舗床モザイクの図像選択は、床に位置するために、壁や天井に配された絵画作品や彫刻作品とは異なると言えるだろう。続いて、このような舗床モザイクにおける図像選択を踏まえつつ、アオスタ大聖堂舗床モザイクの図像について月暦図を中心に検討する。

### 4) アオスタ大聖堂舗床モザイクの図像 一月暦図を中心に

アオスタ大聖堂の舗床モザイク(12世紀後半)には、前述したように、中央に年の擬人像、円形放射状の

23) Manuel Antonio Castiñeiras, "Gennaio e Giano bifronte: dalle "anni januae" all'interno domestico (secoli XII-XIII)", *Prospettiva*, vol. 66, 1992, pp. 53-63.

24) 『語源』第5巻33章3節における記述は以下の通り: "Ianuarius mensis a Iano dictus, cuius fuit a gentilibus consecratus; uel quia limes et ianua sit anni. Vnde et bifrons idem Ianus pingitur, ut introitus anni et exitus demonstraretur." (Isidorus Hispalensis, *Etymologiarum sive Originum libri XX*, Turnhout: Brepols Publishers, 2010, Library of Latin Texts, <<http://clt.brepolis.net/llta/pages/QuickSearch.aspx>>, 最終アクセス: 2023年6月19日。)「1月(Ianuarius mensis)は、異教徒によりヤヌス(Iano)に捧げられており、また1年の境目、出入り口(ianua)であることからそう呼ばれている。そのため、ヤヌスは二つの顔を持ち、1年の入り口と出口を示すように描かれている。」(筆者による試訳。以下の英訳も参照した: Stephen A. Barney, W. J. Lewis, J. A. Beach and Oliver Berghof, trans. *The Etymologies of Isidore of Seville*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006, in part. p. 128.)

25) 舗床モザイクの図像選択については、以下参照: Ernst Kitzinger, "World map and fortune's wheel a medieval mosaic floor in Turin", *Proceedings of the American Philosophical Society*, vol. 117, no. 5, 1973, pp. 344-373, in part. pp. 344-347; 辻佐保子『古典世界からキリスト教世界へ—舗床モザイクをめぐる試論—』岩波書店、1982年、in part. pp. 11-12.

26) 427年の布告とは、427年にテオドシウス2世ならびにヴァレンティニアヌス3世により、十字架ないしそれに準ずるキリストのモノグラムを床面に配することを禁じる布告である「シグナム・クリスティ」が発せられたことを指す: 辻, 『古典世界からキリスト教世界』, 1982, *op. cit.*, in part. pp. 11-12. 『ギョーム大修道院長に送る弁明』12章における記述は以下の通り: "Ut quid saltem Sanctorum imagines non reveremur, quibus utique ipsum, quod pedibus conculcatur, scatet pavimentum? Saepe spui-tur in ore Angeli, saepe alicuius Sanctorum facies calcibus tunditur transeuntium. Et si non sacris imaginibus, cur vel non parcitur pulchris coloribus? Cur decoras quod mox foedandum est? Cur depingis quod necesse est conculcari? Quid ibi valent venustae formae, ubi pulvere maculantur assiduo?" (St. Bernard of Clairvaux, *Apologia ad Guillelmum abbatem*, Turnhout: Brepols Publishers, 2010, Library of Latin Texts, <<http://clt.brepolis.net/waseda.idm.oclc.org/llta/pages/QuickSearch.aspx>>, 最終アクセス: 2023年6月18日。)「足で踏みつけられる舗床に満ちている聖人たちの像に対して、われわれはどのような挨拶をしているだろう。天使の顔はしばしば唾され、聖人の顔は通り行く者たちに踏まれる。聖人の像を減らすことはできないにしても、なぜ派手な色を地味にできないのか。すぐに朽ちてしまうものをなぜ飾るのか。足で踏みつけるべきものをなぜ描くのか。誇りにまみれてしまう像が何になるのか。」(杉崎泰一郎訳「クレルヴォーのベルナルドゥス『ギョーム修道院長への弁明』」、上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成〈10〉修道院神学』平凡社、1997、pp. 483-484.)

構図の月暦図、そして四隅に天国の四つの川の擬人像が配されている。

キアラ・フルゴーニは、モデナ大聖堂「魚市場の扉口」アーキトレーヴ中央の蔓で表された十字架（図18）が、中央にキリスト、周囲に十二使徒、四隅に四福音書記者を配する構図、あるいは年の擬人像の周囲に月々の擬人像、黄道十二宮、四季を表す構図に類似すると述べている<sup>(27)</sup>。シカルド・ダ・クレモナは、年がキリストを、四季が四福音書記者を、12か月が十二使徒を表すと記した<sup>(28)</sup>。フルゴーニはこのシカルド・ダ・クレモナの記述に依拠し、12世紀制作のヴェルテンベルク州立図書館所蔵の写本挿絵（Cod. hist. fol. 415, f. 17v）（図19）に表されているような年の擬人像の周囲に月々の擬人像、黄道十二宮、四季を配した構図が、キリストの周囲に十二使徒と四福音書を配した構図と互換性がある点を指摘している。マッダレーナ・ヴァッカロもシカルド・ダ・クレモナの記述に準拠し、年の擬人像（アヌス）の図像がキリストの図像に結びつくとした<sup>(29)</sup>。さらにアルトゥーロ・カルロ・クインタヴァッレは、月暦図とともに表される年の擬人像がキリストを象徴すると指摘している<sup>(30)</sup>。

また辻佐保子は、12という数の一致に基づいて、キリストを太陽あるいは日に、十二使徒を12か月あるいは12時間になぞらえた3世紀から4世紀のユダヤ教著作家やキリスト教教父たちの記述に着目し、床面であるためにキリストと十二使徒を直接的に描写することが避けられた舗床モザイクにおいて、太陽（ヘリオス）と月暦図を円形放射状に配した構図が、天井装飾におけるキリストと十二使徒を想起させると指摘している<sup>(31)</sup>。

以上の先行研究を踏まえ、アオスタ大聖堂舗床モザイクの図像が直接的にキリスト像を表すことを避ける舗床モザイクである点、円形放射状の構図で月暦図を表して



図18 モデナ大聖堂北扉口「魚市場の扉口」、アーキトレーヴ中央部分、12世紀初頭



図19 「年周期の宇宙論的表」、1162年、シュトゥットガルト、ヴェルテンベルク州立図書館蔵（Cod. hist. fol. 415, f. 17v）

<sup>(27)</sup> Chiara Frugoni, “Il ciclo dei Mesi nella «Porta della Pescheria» del Duomo di Modena”, in *La Porta della Pescheria nel Duomo di Modena*, ed. Chiara Frugoni, Modena: Franco Cosimi Panini, 1991. pp. 13-32, in part. pp. 27-28.

<sup>(28)</sup> シカルド・ダ・クレモナの記述は以下の通り：Sicardo da Cremona, *Mitrato*, PL, CCXIII, col. 232, “Annus est generalis Christus cuius membra sunt quatuor tempora, scilicet quatuor evangelistae...duodecim menses hi sunt apostoli” (*ibid.*, in part. p. 28.) 「年は一般的にキリストであり、その四肢は四季、つまり四福音書記者である…ここで12か月は十二使徒である」（筆者による試訳。以下のイタリア語訳も参照した：*ibid.*, in part. p. 28.)

<sup>(29)</sup> Vaccaro, “Pavia, città ragguardevole”, 2016, *op. cit.*, in part. pp. 226-227.

<sup>(30)</sup> Arturo Carlo Quintavalle, “Mosaici pavimentali come immagine del mondo l’ideologia della Riforma a Cremona, Pavia e Reggio Emilia”, *Storie di artisti, storie di libri: l’editore che inseguiva la bellezza: scritti in onore di Franco Cosimo Panini*, ed. Franco Cosimo Panini, Roma: Donzelli, 2008, pp. 3-32, in part. p. 31.

<sup>(31)</sup> 辻, 『古典世界からキリスト教世界』, 1982, *op. cit.*, in part. p. 106.

いる点を考慮すると次のように考えられるだろう。中央の太陽と月を持つ年の擬人像はキリストを、周囲の12か月の擬人像は十二使徒を、四隅の天国の四つの川の擬人像が四福音書記者を象徴する可能性がある。しかし、時間や1年を通して行うべき労働に着目した月暦図の性格上、12か月の擬人像が労働により得られる時間の神聖さを強調する可能性がある点にも留意すべきだろう<sup>32)</sup>。また、現存部分はオリジナルの状態の一部であり、完全な状態ではないと考えられる。そのためアオスタ大聖堂舗床モザイクの図像が、舗床モザイクによくみられる地上世界の表現である可能性も否めない。それゆえ、アオスタ大聖堂舗床モザイクの図像について結論を見出すためには更なる検討が必要である。

#### 4. おわりに

アオスタ大聖堂の舗床モザイクの図像解釈については検討の余地がある。しかし、そこに配された月暦図は、基本的には西欧ロマネスクの伝統的な図像の一環として位置付けることが可能であろう。一方、1132年に改革が行われたサントルソ聖堂の回廊の柱頭彫刻には改革に携わった人物の図像やタイトル聖人である聖オルソの聖人伝のエピソードを含む図像がみられる。また、サントルソ聖堂の舗床モザイクの図像に関しても改革の影響が指摘されている<sup>33)</sup>。つまり、サントルソ聖堂では1132年の改革以降に制作された聖堂装飾に改革の影響が反映されていると考えられる。

一方、ここで検証してきたように、アオスタ大聖堂舗床モザイクの図像は同時代に広く普及していたものであり、1132年の改革の影響は見られない。アオスタ大聖堂は12世紀後半にサントルソ聖堂との対立が解決された後も聖アウグスティヌス会則を取り入れず体制を変えることはなかった。こうした宗教的背景は、舗床モザイクの図像からも伺うことができるのである。

なお、12世紀アオスタの典礼に関する先行研究として、ロベール・アミエやマリア・ルイーザ・ヴァッラークア・グアリエントがアオスタ溪谷の典礼用写本について述べているものの、典礼、さらに典礼と聖堂装飾との関係性については研究余地があると考えられる<sup>34)</sup>。今後の課題として、12世紀アオスタにおける典礼と聖堂装飾の関係性についての考察を通し、宗教的背景を踏まえた聖堂装飾に関するより深い議論を行いたい。

#### 〈図版出典〉

##### ・ 図 1

Regione Autonoma Valle d'Aosta, "Rapport Annuel 2015".

〈[https://www.regione.vda.it/rapportoannuale2015/rapport\\_istr\\_26.html](https://www.regione.vda.it/rapportoannuale2015/rapport_istr_26.html)〉, 最終アクセス: 2023年5月24日.

##### ・ 図 2

Edoardo Brunod, *La cattedrale di Aosta*, Aosta: Musumeci, 1975, in part. p. 95, fig. 52.

##### ・ 図 3

Papone, Paolo and Viviana Vallet, "Il mosaico del coro", *Sant'Orso di Aosta: il complesso monumentale* 1, ed. Bruno Orlandoni and Elena Rossetti Brezzi, Aosta: Tipografia Valdostana, 2001, pp. 35-48, in part. p. 36.

##### ・ 図 4

2023年4月25日筆者撮影.

32) ヴァッカロは、年の擬人像の左右に12か月の擬人像が配されたサン・ミケーレ聖堂（パヴィア）の舗床モザイクに関する先行研究において、前述したように年の擬人像とキリストの関係を指摘している。一方、周囲に配された12か月の擬人像について、十二使徒と読み取ることもできるが、月暦図の場合には労働により得られる時間の神聖さを強調するとしている。ヴァッカロの先行研究は以下参照：Vaccaro, "Pavia, città ragguardevole", 2016, *op. cit.*, in part. pp. 226-227.

33) Papone and Vallet, "Il mosaic del coro", 2001, *op. cit.*, in part. pp. 38-39; Lucy Donkin, "Ornata decenter: perceptions of 'fitting decoration' amongst Augustinian canons of Sant'Orso in Aosta in the mid-twelfth century", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 71, 2008, pp. 75-93. 筆者は、サントルソ聖堂舗床モザイクにおける改革の影響に関して論じた研究ノートを出版予定である：天幸奈穂、「アオスタのサン・ピエトロ・エ・サントルソ参事会聖堂舗床モザイクについて 一宗教的背景を中心に」『美術史研究』61冊、2023年（印刷中）。

34) Robert Amiet, *Repertorium liturgicum Augustanum: les témoins de la liturgie du Diocèse d'Aoste* 1, Aoste: Typo-offset, 1974; Robert Amiet, *Repertorium liturgicum Augustanum: les témoins de la liturgie du Diocèse d'Aoste* 2, Aoste: Typo-offset, 1974; Guariento, *I codici liturgici decorati e miniati delle Biblioteche della Valle d'Aosta*, 2000, *op. cit.*

・ 図 5

Brunod, *La cattedrale di Aosta*, 1975, *op. cit.*, in part. p. 101, fig. 67.

・ 図 6, 7

*Ibid.*, in part. p. 96, fig. 53, 54.

・ 図 8, 9, 10, 11

*Ibid.*, in part. p. 97, fig. 55, 57, 56, 58.

・ 図 12, 13, 14, 15

*Ibid.*, in part. p. 98, fig. 59, 61, 60, 62.

・ 図 16, 17

*Ibid.*, in part. p. 99, fig. 63, 64.

・ 図 18

2023年5月16日筆者撮影。

・ 図 19

Stuttgart, Württembergische Landesbibliothek, “Chronicon Zwifaltense minus”, Cod. hist. fol. 415, f. 17v, “Digitale Sammlungen der Württembergischen Landesbibliothek”. ([https://digital.wlb-stuttgart.de/sammlungen/sammlungsliste/werksansicht?tx\\_dlf%5Bdouble%5D=0&tx\\_dlf%5Bid%5D=13716&tx\\_dlf%5Border%5D=title&tx\\_dlf%5Bpage%5D=40&cHash=0ff633cb59ba07549dab64e8712e48bc](https://digital.wlb-stuttgart.de/sammlungen/sammlungsliste/werksansicht?tx_dlf%5Bdouble%5D=0&tx_dlf%5Bid%5D=13716&tx_dlf%5Border%5D=title&tx_dlf%5Bpage%5D=40&cHash=0ff633cb59ba07549dab64e8712e48bc)), 最終アクセス：2023年5月20日。